

○河口 敏浩¹, 大林 沙也加², 河口 仁美¹, 東 豊¹, 松尾 浩民² (1有限会社相思樹 ハートライフ薬局, 2就実大学 薬学部)

目的

患者に対して安全で有効な薬物療法を提供するために、処方せんの監査および疑義照会は、薬剤師が行う重要な業務の1つである。

本研究では、保険薬局における疑義照会状況について調査・解析し、その結果から現状を把握し、今後の課題および対応策について検討することを目的とした。

方法

調査は2015年1月1日から2015年12月31日までの1年間に、ハートライフ薬局全3薬局で応需した全処方せんを対象とした。

電子薬歴上の情報および疑義照会内容を記録したノートを用い、疑義照会内容をカテゴリー別に7種に分類し、患者年齢や時間帯との関連性を含めて解析を行った。

結果

- 調査期間中、全処方せん受付回数(30,606件)の67.5%は門前医院より発行されていた。
全処方せん受付回数の1.8%に相当する564件の疑義照会が行われた。
疑義照会の62.2%は門前医院に対して行われた。
疑義照会により処方内容が変更となったケースは97.8%(551件)であった。
疑義照会564件の内訳は、男性:247件、女性:317件であり、患者の平均年齢は男性:65.2歳、女性:62.3歳であった。
疑義照会を年代別に集計した結果、60歳以上が、全体の約70%を占めた。
疑義照会内容の分類を行った結果、「C:安全性」に関する疑義が35.1%と最も多かった。
分類と患者年齢との関連性について、男女ともに60歳以上90歳未満における「C:安全性」に関する疑義照会が多く、特に70歳代が最多であった。
疑義照会を行った時間帯と患者年齢との関連性について、午前中は60歳代以降の高齢者が多く、特に10~12時に70歳代における疑義照会が最多であった。
50歳未満では、16~18時に40歳代の疑義照会が最多であった。

薬局の背景

ハートライフ薬局は、岡山市内に3店舗(北区2店舗:京町店、西大寺町店・南区1店舗:浦安店)を展開しており、3店舗のいずれもが内科(消化器科、呼吸器科、血液内科)開業医と連携している。各薬局の現状は以下の通りである。

- 浦安店:岡山市南区。開局18年。処方せん枚数は約13200枚/年。処方せん受付総医療機関数は約80医療機関/年。
京町店:岡山市北区。開局15年。処方せん枚数は約9000枚/年。処方せん受付総医療機関数は約60医療機関/年。
西大寺町店:岡山市北区。開局4年。処方せん枚数は約7200枚/年。処方せん受付総医療機関数は約50医療機関/年。

3店舗とも門前医院との在宅連携はもちろんのこと、周囲の医療機関とともに在宅医療に取り組んでいる。

分類
A:日数・回数
B:用法・用量
C:安全性
D:コンプライアンス・QOL
E:処方せんの記入漏れ・判読不能
F:処方意図の確認・適応外処方
G:その他

Table with columns: 年・月, 分類(A-G), Total, 全処方せん(ALL, 門前数, 門前率), 疑義照会(門前率, 変更数, 変更率)

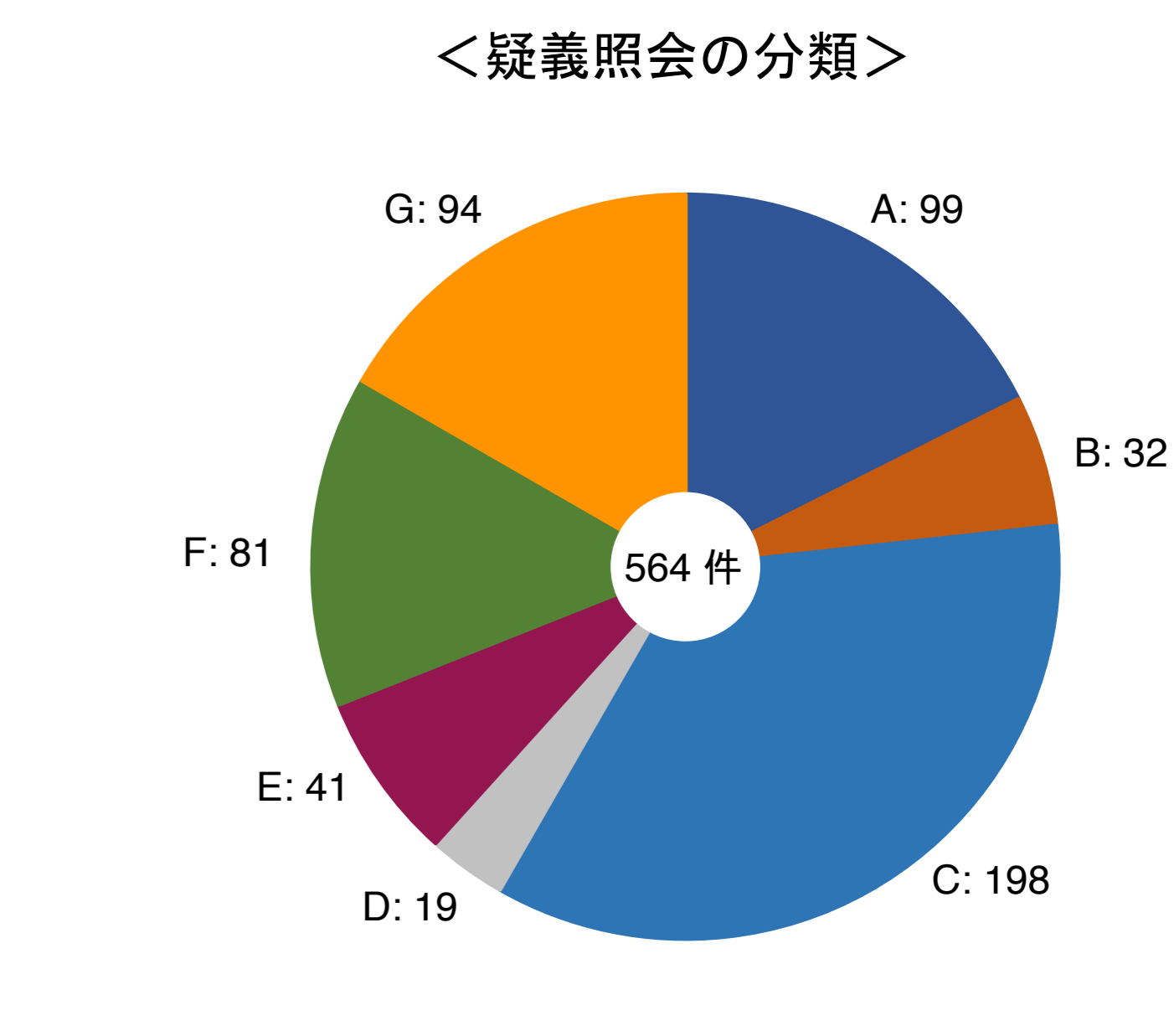
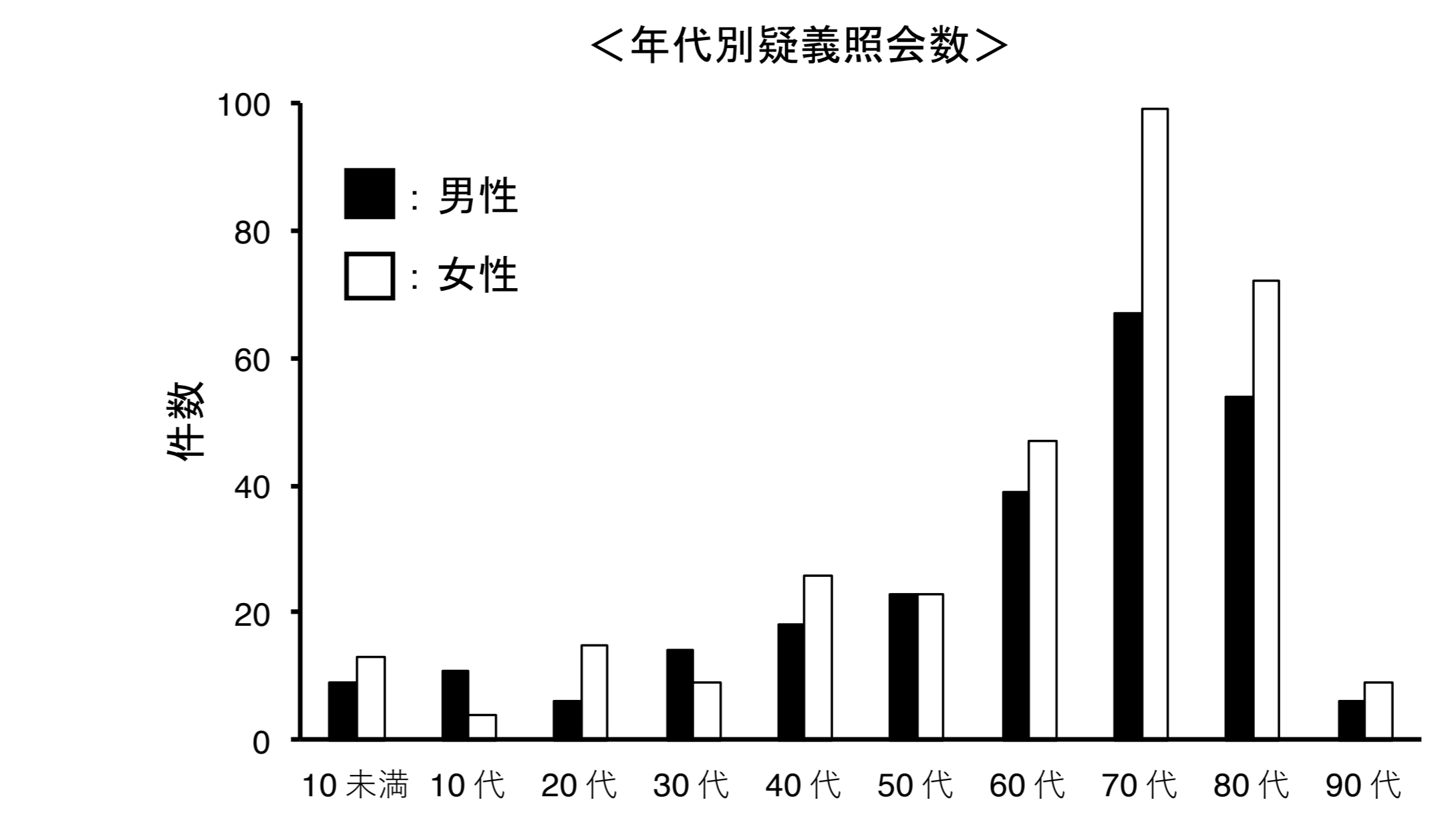
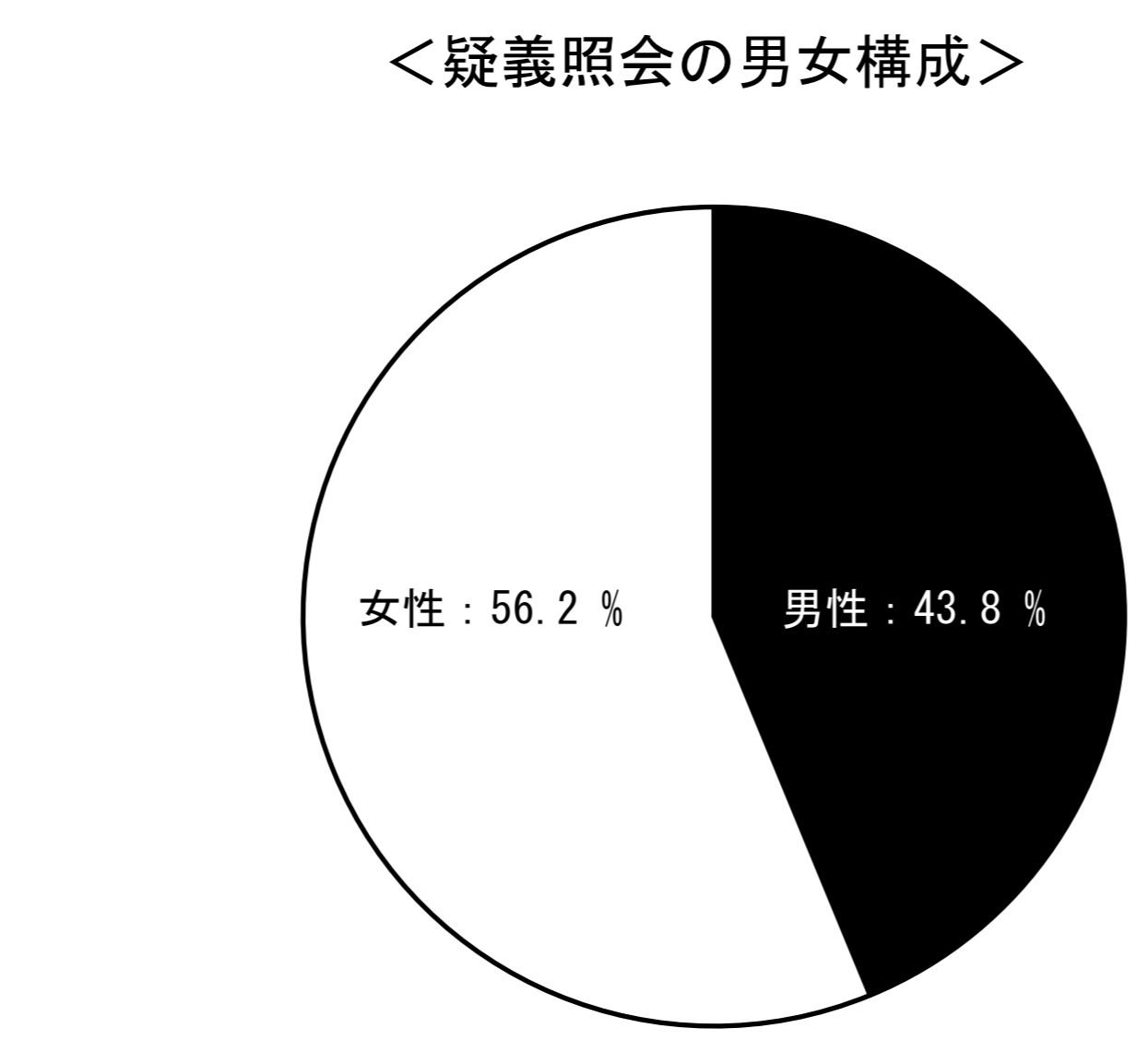
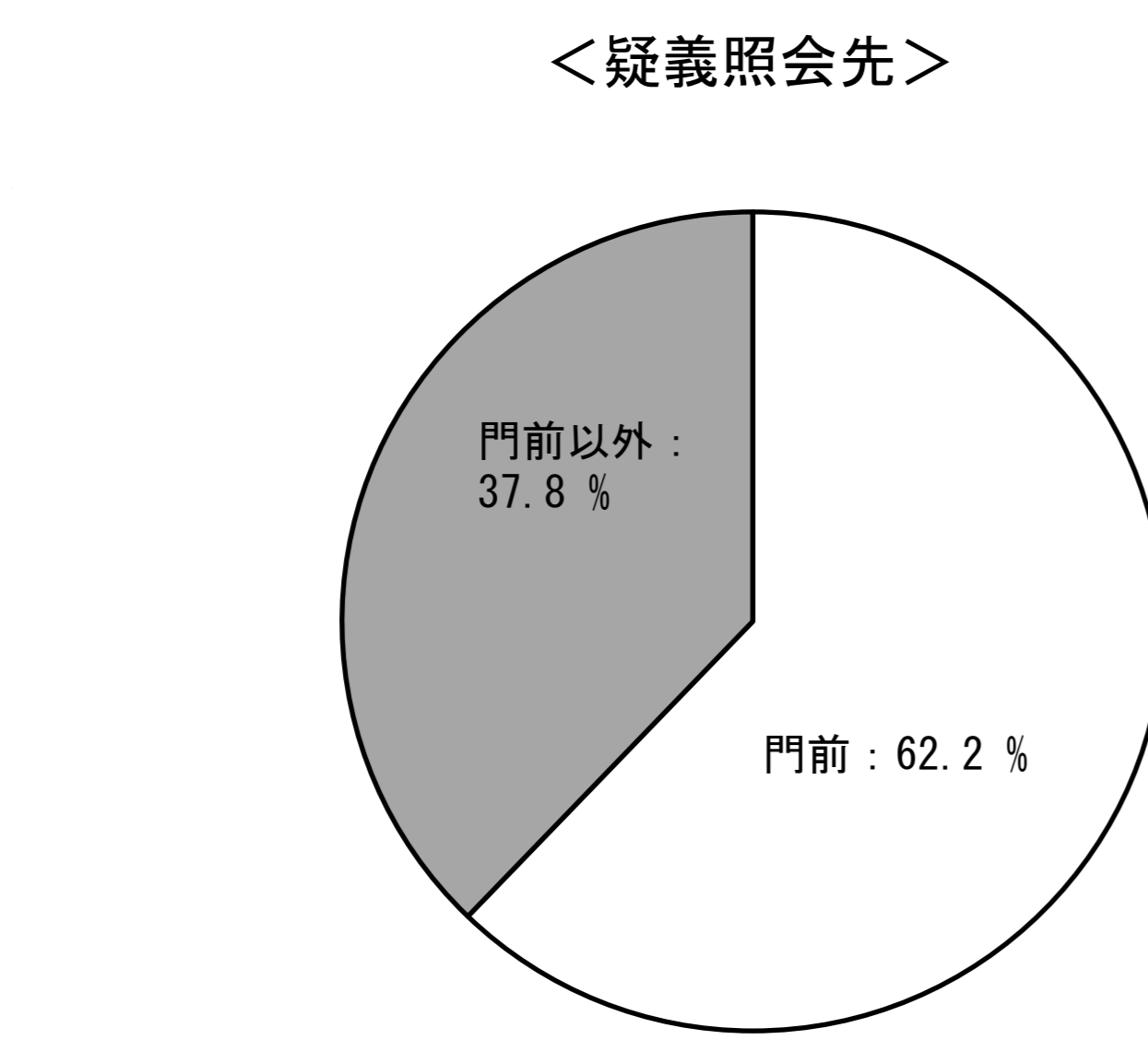
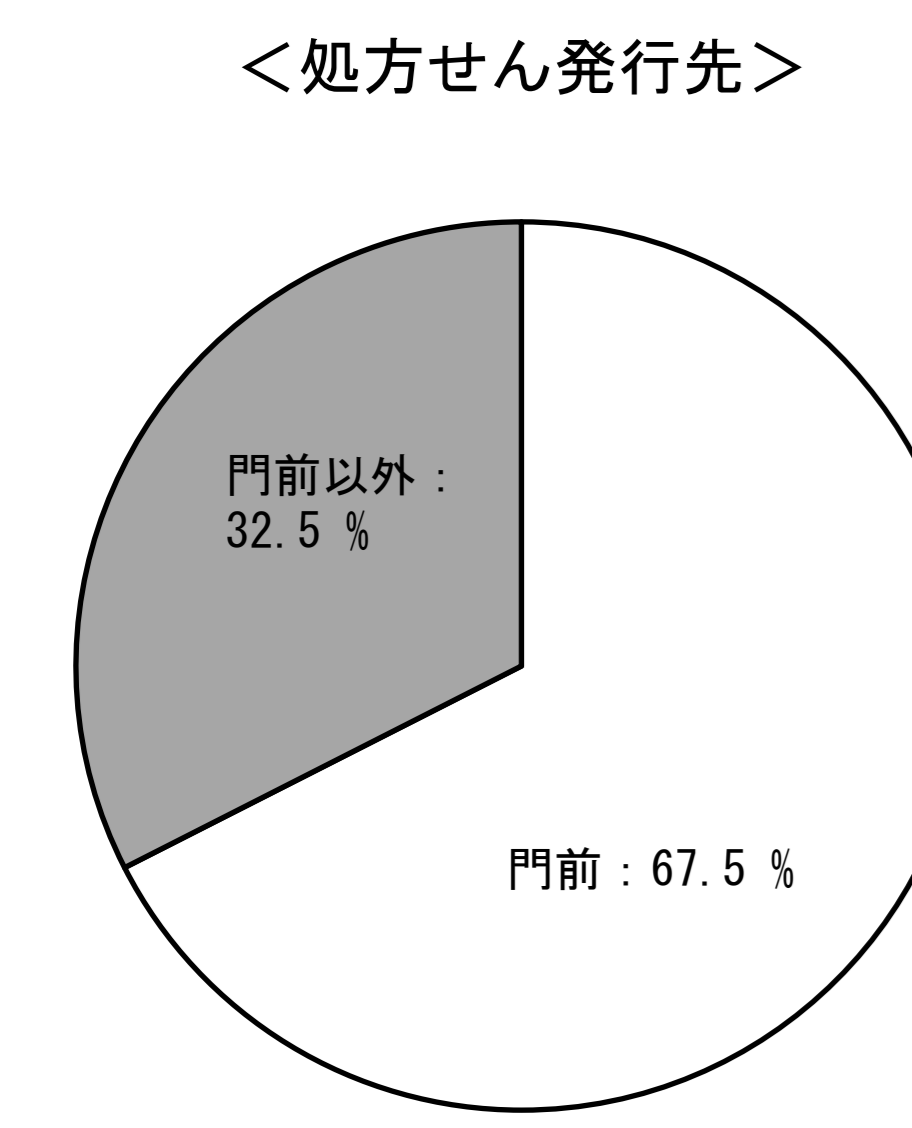


Table showing classification by age and gender (分類・年齢・性別) with columns for age groups and classification types A-G.

Table showing consultation counts by time period and age/gender (時間帯・年齢・性別) with columns for time periods and age groups.

考察

全疑義照会の集計・解析を行った結果、当薬局では「C:安全性」に関する疑義照会が最も高い割合を占め、疑義照会により処方内容が変更となったケースが97.8%(551件)であったことが明らかとなった。

- 医師と薬剤師との密接な連携が構築されており、疑義照会が確実に実施されている。
患者にとって薬剤師が信頼できる存在であるため、医師に対して言えない要望も薬剤師に対しては言うことができ、その上で薬剤師が患者と医師との橋渡しの役割を果たしている。

<分類と年齢の関連性について> 「C:安全性」において60歳代以上の来局が多く、当薬局の患者層が反映されていると考えられる。調査期間中、薬物相互作用に基づく疑義照会はほとんどなかったことや来局者に高齢者が多いことから、薬物相互作用以外の理由に起因する安全性に関連した疑義照会が多くを占めたと考えられる。

<時間帯と年齢の関連性について> 疑義照会ピークが午前と午後の2回に認められ、来局者の生活様式が反映された結果と考えられる。即ち、午前中は主に60歳代の患者が開院まもなく受診をしているためであり、午後は勤務から帰宅途中の40歳代や午前中を余暇に費やした高齢者が来局したことによると推察される。

全体として、来局者の平均年齢が男女ともに高く、これに伴い疑義照会も高齢者に多い結果であった。当薬局は処方せん受付回数、疑義照会先のいずれも門前率が高く、特に高齢者の患者が多いことや処方内容の変更率が高いことを考慮すると、当薬局は地域に根付いた存在であり、処方せん調剤に関するかかりつけ薬局としての役割を担っていると考えられる。

今後の課題として、高齢者の来局が多い現状から、一包化や剤型変更の提案など患者のコンプライアンス改善のために積極的に介入し、「かかりつけ薬局の薬剤師」として、患者や地域住民の健康づくりを支援することが重要であると考えられる。

結論

患者の年齢や要望に応じた処方変更や調剤提案を含めた疑義照会を行うことにより、服薬コンプライアンスの向上や残薬の解消等への貢献が可能である。

謝辞

薬局業務の忙しい中、本調査にご協力を頂きました相思樹 ハートライフ薬局の皆様へ、深く感謝申し上げます。

利益相反の開示

今回の発表に関し、開示すべき利益相反はありません。